

災害医療ACT研究所の研修会受講を奨めます

熊本県赤十字血液センター 所長 井 清司

阪神大震災以降、関係者の方々の弛まぬ努力で災害医療は少しずつ進歩し、各組織や団体が準備を重ねてきたところに、東日本大震災が発生しました。被災地には、沢山の救護団体が集まりましたが、全体に調整がとれず、秩序のある有効な救護活動が行われたとは言えません。唯一、宮城県の石巻地域は、災害医療コーディネーターが中心となり、支援スタッフと共に活動し、秩序のとれた災害医療コーディネートをを行い「石巻モデル」と呼ばれ、その後に大きな影響を与えました。

短期間でしたが、石巻圏合同医療調整本部で、お手伝いをさせていただいた私は、熊本県でもこの仕組みを作って研修を行っておく必要があると確信し、県へ働きかけ、九州では初めて2013年に医師15名を災害医療コーディネーターとして登録していただきました。また今回の熊本地震までに災害医療ACT研究所による災害医療コーディネート研修会を計3回開催し、15名の医師に加えて県内の医師会、保健所長、県庁担当部局職員など、総計70名余に受講していただき、災害時の医療調整の具体的な活動や役割について関係者のイメージの共有化を図っていました。

熊本地震では発災以降、登録された医師は交代で勤務にあたりDMAT・日赤・JMATなどの医療チームを主にDMAT調整本部のスタッフに支援されつつ、県庁内の対策本部で活動しました。発災5日目以降は、県庁の医療調整本部の下に二次医療圏毎に保健所長や医師会長などを中心とする医療調整本部を設置し、救護班の活動の調整を行い、状況に応じて二次医療圏の下にも調整本部を置き、地区によっては3階層の調整系統が構築されました。定期的に情報交換の会議を開催し、避難所で肺塞栓症や感染症課題が発生すれば、全県下で統一した対応策を講じました。こうした指揮系統が大きな混乱なく運営できたのは、災害医療ACT研究所の研修会の受講と事前準備、発災直後の全体集会での方針確認が大きなポイントであったと思います。

振り返ってみますと、熊本県で災害医療ACT研究所の研修会を開催していただいて本当に良かったと思います。コーディネーターを登録していなかったら…、研修会を行っていなかったら…、などと考えると、熊本地震では更に大きな混乱が発生していたことでしょう…。

これから、災害医療コーディネーターを登録し研修を始めようとしている地域の方々に、災害医療ACT研究所の研修会受講を自信もってお奨めします。